

今週のメニュー

■トピックス

◇塩ビサイディングによる塩害、硫化水素害保護効果検証データを
日本建築学会九州支部大会で発表

樹脂サイディング普及促進委員会

■随想

◇古代ヤマトの遠景（73）－【初代倭王の名称】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

■編集後記

■トピックス

◇塩ビサイディングによる塩害、硫化水素害保護効果検証データを
日本建築学会九州支部大会で発表

樹脂サイディング普及促進委員会

去る3月3日、大分大学旦野原キャンパスにおいて日本建築学会九州支部大会が開催され、琉球大学より（1）「塩ビサイディングの飛来塩分遮蔽性能に関する研究」（暴露3年目の結果）及び九州大学より（2）「火山性ガスに曝されるコンクリート構造物の塩ビサイディングによる保護効果に関する長期曝露実験」（曝露2年目の結果）の発表が行われました。



塩ビサイディングは「木造戸建て住宅用の外装材」で、「何故コンクリート構造物の保護効果の研究なの？」と思われる方も多いと思います。実際、戸建て住宅のリフォーム用として寒冷地を中心にご利用頂いているケースが圧倒的に多いのが現状ですが、凍害のある寒冷地以外にも沿岸部の塩害や火山地域の硫黄害（火山性ガス）を受ける地域が日本には数多くあります。特にRC（コンクリート）建造物は鉄筋が入っていることから、その腐食が建造物の短命化に繋がるため、**塩害**、**硫黄害**や凍害を受けない塩ビサイディングにより建物躯体を保護することができればこれら地域におけるRC建築物の長寿命化にも寄与できるのではないかと考え検証を行っているものです。

それでは、今回の発表内容をご紹介します。まず、飛来塩分遮蔽性能に関する研究ですが、本研究は3年前から沖縄県(辺野喜)、北海道(泊)の海岸線に鉄筋コンクリート躯体に塩ビサイディングを施工した試験体、コンクリート打ち放しの試験体によりコンクリート躯体への塩分浸透と鉄筋腐食の状況を観察しています。

曝露1年経過時点から、塩ビサイディング施工試験

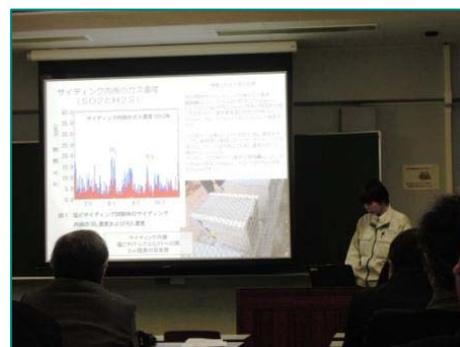


研究発表(塩害)の様子

体にはほとんど塩分（塩化物イオン）が浸透していないことが確認されていましたが、3年経過でその結果が改めて確認された他、コンクリート打ち放しの試験体の1部ではコンクリート中の塩分量から鉄筋に腐食発生の可能性が示唆される結果となりました。

次に火山性ガス（硫化水素等）からの保護効果に関する研究ですが、本研究は2年前から鹿児島県(霧島)の曝露場にコンクリート躯体に塩ビサイディングを施工した試験体、ウレタン塗装、フッソ塗装をした試験体、コンクリート打ち放しの試験体により硫化水素(H₂S)や二酸化硫黄(SO₂)のコンクリート躯体への影響を観察しています。

曝露後2年経過していますが、現時点で、効果について結論を導くまでのデータはとれておらず、継続して観察することとしています。



研究発表(硫黄害)の様子

海に囲まれ火山が多く南北に長い国土を有する日本の家屋は、塩害、硫黄害、凍害等様々な厳しい自然環境に晒されており、これら厳しい環境から如何に家屋を守り長持ちさせるかは大きな課題です。引き続きの研究を通じ塩ビサイディングが少しでもそのお役に立つことができればと願っています。

最後になりましたが、本研究のご指導を頂いております九州大学／小山智幸准教授、琉球大学／山田義智教授、日本大学／湯浅昇教授、並びに学会発表の労を賜りました琉球大学／比嘉孝之様、株式会社麻生／平山茉莉子様には厚くお礼申し上げます。

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景（73）－【初代倭王の名称】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

前回までに継体天皇王家の誕生と、磐井の乱の真相解明を行ってきた。これからは継体天皇に続く欽明・敏達天皇の時代説明に入りたいところであるが、実は、この両天皇は継体天皇の意思を受け継ぎ、初代倭王の実質的な復権を図るのである。具体的には、初代倭王に諡号をおくり、全国的にその祭祀を展開したのである。このため初代倭王を祭神とする神社が各地に誕生するが、その結末は意外な展開となる。当然、伊勢神宮もその影響を受けるが、その後、苦悩の時代を迎えることになる。

継体天皇以降の時代を概観すると、初代倭王については以上のようなことが云えよう。この倭王の出自は出雲であることをこれまでに論じてきたが、今回からは、も一度この倭王に立ち返り、記紀の中でどのような名称で呼ばれていたかを見てゆくことにする。

記紀の中で、初代倭王の名称は明確には記述されていない。しかし、初代天皇の名称は明確である。それは良く知られている神武天皇である。もし、初代倭王と初代天皇とが同一人物であれば、話は簡単である。ところが、記紀では崇神天皇こそ初代天皇と見なしていたようである。そのことは、先の「[古代ヤマトの遠景](#)」(8)で触れたとおりである。

このように初代倭王は崇神天皇だとしても、ここで紹介したいと考えている本来の名称ではない。この崇神なる名称は八世紀中葉になって、淡海三船が神武天皇以下の諸天皇に漢風諡号を撰進したことに由来するとされているからである。漢風諡号は基本的に二字構成になっている点で特徴があり、現代人が使用している天皇の名称は全て漢風諡号である。これに対し和風諡号なるものも当然有る。例えば、崇神天皇の場合は「御間城入彦五十瓊殖天皇」(みまきいりびこいにえのすめらみこと)がこれに当る。この諡号から、初代倭王は「御間城入彦」の名で親しまれていた可能性があるが、どうも当時はそのような状況ではなかったようである。



神武天皇を祀る橿原神宮 (奈良)
(背景は畝傍山)

その理由は和風諡号の誕生にある。このような和風諡号がいつ頃生まれたのかという問題である。この問題解明の嚆矢とも云うべき論文は、戦後間もなく水野祐氏によって出された。その内容は『日本古代王朝史論序説』に収められているが、この中で氏が導き出した天皇諡号に関する結論は次のようなものである。

- ① 推古天皇時代においてすでに、和風諡号の原型は成立していたものと考えられる。
- ② 仁徳系諡号の成立は最も古く西暦五世紀である。
- ③ 次に古いのは崇神系、安閑系、欽明系、用明系諡号の順で、いずれも西暦六世紀末より七世紀初頭の成立と見られる。
- ④ 『記・紀』編纂時に神武天皇以下多くの天皇や神功皇后等が架空的に作り出され、そのとき諡号も一括して選定された。

以上のような結論から、崇神天皇の諡号は六世紀末から七世紀初頭にかけて選定されたといえそうである。要するに推古朝の時代である。初代倭王の没年は、ここでは四世紀初頭と推定しているが、その没後、直ちに諡号が贈られたのではなく、倭国歴史の編纂事業が本格化した推古朝頃から歴代天皇の和風諡号が適宜、創作されていったということである。

このように見てくると、各天皇の諡号というものは甚だ新しく、人々がこの諡号に親しむ間もなかったということである。七二〇年の日本書紀の撰上後、多くの人々はこれを知ることになるが、七六〇年代には淡海三船による漢風諡号の撰進があり、恐らく人々は和風諡号よりは漢風諡号に親しんだのではなかろうか。従って、「御間城入彦」などという略称が生まれる間もなかったのである。

主要天皇の漢風諡号と和風諡号

代	漢風諡号	和風諡号 (読み)
初	神武天皇	神日本磐余彦天皇 (かむやまといわれびこのすめらみこと)
10	崇神天皇	御間城入彦五十瓊殖天皇 (みまきいりびこいにえのすめらみこと)
15	応神天皇	誉田天皇 (ほむたのすめらみこと)
26	継体天皇	男大迹天皇 (おおどのすめらみこと)
39	天武天皇	天淳中原瀛真人天皇 (あめのぬなはらおきのまひとのすめらみこと)

以上に見てきたように、初代倭王に対する、「崇神」、「御間城入彦五十瓊殖」といった諡号は、推古朝以降に生まれたものといえるが、この稿の冒頭に、欽明・敏達天皇によって贈られたと述べた諡号は、未だ何処にも顔を出していない。しかも、この諡号が皇統譜の中に全く現れてこないということは、歴史編纂を推進した蘇我氏によって、抹消されたことを意味している。ところが、彼らといえどもあまりの恐れ多い所業に臆したのか、その痕跡を記紀の中に幾つか留めている。

次回以降はこの痕跡を集め、本来の諡号を再構築する作業に取り掛かることにする。

なお付言すれば、上記水野裕氏は、著書『日本古代王朝史論序説』の中で、「三王朝交替説」を提示したことでも有名である。崇神王朝、応神王朝、継体王朝はそれぞれ独立した王朝で、それが交替したとするものである。発表されたのは昭和 27 年と、戦後間もない頃であり、万世一系の天皇家という概念を打ち破ると言う意味で、当時は大いに話題となり、賛否両論で賑ったようであるが、現在では、否定説の方が大勢のようである。

理由は、完全に独立した三王朝というものの想定に無理があるということである。或る独立勢力が既存の王朝を倒し、新しい王朝を建てたとした場合、これは中国の歴史と同じ形に成り、倭の新王朝は旧王朝を倒した歴史書を編纂するはずである。ところが、記紀の何処を見てもそのような記述は無い。更に中国では、王朝を開いた氏族名、例えば漢王朝は「劉」氏と言った名称が知られているが、倭国の場合、王家の氏族名は現在の天皇家に至るまで存在しない。これは、王家の交替は有り得ても、王朝の交替は無かったことを示している。

本稿『古代ヤマトの遠景』の立場は、三王朝ではなく三王家を立てるところまでは、類似的な考え方であるが、各王家の血脈は際どく繋がっているとするのがその主張である。詳しくは、本稿「[応神王家の誕生](#)」[\(58\)](#) [\(59\)](#)、「[継体王家の誕生](#)」[\(65\)](#) [\(66\)](#)を参照願いたい。

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)

「古代ヤマトの遠景」：[バックナンバー](#)

■ 編集後記

桜のシーズンになると、通勤電車の中から思わぬところに桜の木があることを発見します。通勤のもうひとつの楽しみは、電車から富士山を探すことです。都心に向かう進行方向が富士山の方角になるため、角度的にも意外と見えるポイントは限られています。最近そのひとつのポイントで建物の建設が進められていて、見えるのがほんの一瞬となりそうで残念に思っています。近年東京では空気もきれいになり、都心から富士山が見える日数が増えてきているとの民間施設の観察の話が新聞に載っていましたが、PM2.5による越境汚染は健康面ではもちろんのこと、景観への影響の面でも気になる場所です。(HI)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp